

能を觀る

理一六 篠原慎治

十一月三日明治節の佳節の式典の後に講堂に於て能が演ぜられて、それを觀覽した。先きに田中教授から能の歴史的な發展經過について説明があつたが當日に更に原田教授から演ぜられる「羽衣」と「熊阪」についての概説が説明せられた。中學時代國語の書物等に於て時々能の中でも有名なものの文章が出てゐたが其れが實際に演ぜられるのを見たのは今回が初めてであつた。最初の「羽衣」では漁夫になつた人が云ふ文句は後方にゐて笛やつづみを打つ人の聲でよく分らなかつたのが残念であつた。天女になつた人がその羽衣を漁夫から返してもらつた禮に天上の舞を舞ふのは一般の舞踊と違つて動作等はゆるやかであるが何か如何にも天上の舞らしいなあと感ぜしめるものがあつて舞ふ人も動作がしなやかでよどみなくすら〜と舞つて大へんうまいと思つた。そのつけてゐる天女の能面は原田教授が説明された如く泣く時はその顔が愁のある顔となつて又面を上げた時は笑を含んだ顔に見えるが實によく作つたものだと思つた。能面を終了後見たが一見何でもない様に無雜作に作つてある様だがあんなに表情が變つて見えるのに驚いた。能面は「熊阪」の長範のかぶる面も如何にもよく作られてゐた。地歌ひの人の歌ふ文句はよく分らなかつたが大へんな美文である事は書物でも讀んで知つてゐたがうたふのを聞いてゐても氣持がよかつた。「熊阪」はよく分らなかつた。能は日本の特徴のある誇るべきものだと思つてゐたがたしかに西洋の所謂オペラや劇（之れは比較するには良い例でないかも知れないが）に比すれば何だか人の心を落着かせ内面的内攻的に人に迫るものがある様な氣持がする。やはり室町時代に盛んだつたものだけに何かよく分らぬが沈潛して行く幽玄さと云ふものがある様だと思つた。武士の荒んだ心を之れで和らげたと云はれてゐたが成程と感ぜられた。能の音楽と云ひ、演者の動作と云ひ能面と云ひ何だか非常に暗示的象徴的な所が多い様に思はれたがその暗示的象徴的な所が日本的性格東洋的な一面である様でもある、能を見るにはその暗示的象徴的な所を吾々の頭で想像し又見て行かねばならぬと聞いたが實際を見て眞に理解するにはさぞかし緊張と教養のある事であらう、吾々には何だか未だ遠い

もの様に感ぜられてしかたがなかつた。

理一ノ一 石 橋 健

東洋は精神的藝術に、西洋は物質的藝術に、夫々他に一步ぬきんでゐると言はれてゐる。而して東洋に於てその最たるものは我が日本であらう。苟も「道」と言はれるもの「武道」にしても「茶道」「花道」もすべて幽明化されたる藝術である。我が國の古典的藝術、それは決して西洋のそれが初對面から眩惑的壯麗を與ふる如きものではない。嗜めばそれたけ味はへばより高く恰も茶を嗜む者の如く、それがもつてゐる無限の價值を樂しむことが出来る。此の意味に於て能——勿論我が國の世界に誇るべき藝術である——を觀る事の意義も更に深いものがあつた。成程誰か「咬めば咬む程味の出るスルメの如き」と言つたが、當はまらないものでもない。一休能の如何なる處が、昔より今まで珍重されつゝある所以であらうか、と考へた。昔の「能」の必要性と今のそれは勿論違つてゐる、而してその藝術價值は何等變れる所はない。此處に於て「能」の普遍性、國民性に則應する何物かがあるに違ひない。而して能を鑑賞せる後で感じたものはあの舞臺一面よりにじみ出る烈々たる氣魄であつた。他見も出来ないあの緊張味であつた。僕はその壓迫に堪え得なかつた。古來幾多の波浪を乗切つて、現在に見せるその永遠性、不撓不屈の能精神。その夜僕は風呂で熊坂の「シテ」をやられた人は以前藝道に行きづまりを來して自殺を圖られたことがある、と言ふ事を聞き、古典藝術の深奥さとそれが興へるひたむきな藝道精進への突進を目のあたり感じて更に今日あの能の醸し出した雰圍氣を改めて泌々と味はひかへしたのである。

理一ノ一 長 谷 川 誠 也

能を生れて初めて見た私は幸に席が前から三列目だつたので、全體を明確にとは言へないが、舞臺のやゝ中央に在る松の影になる部分を除いて大體觀察する事が出来た。獨特のゆるやかな然も何處か鋭さで以て能は進行して行くやがて舞臺の右側の幕が内側の二人の者によつて敏速にかゝげられる。白い衣に身を包んだ身の丈五尺七、八寸あると思はれる天女

が出て来る、その顔に、一種の恐怖の目を上げると、わづかほゝえんだ無表情の小型な、赤味が黄色味をおびた、わづか口を開いてゐる天女今しがた次第に舞臺の中央へと、デリケートな歩み動作によつて歩いて来ると言ふより移動する、さうしてわづか開いた口から、澄んだ、鋭い刺す様な聲がもれて来る、殆ど永く見つめる事が出来ぬ、漁師の方に目をそゝぐ、その時何か言つて天女の體が動く漁師の姿を今度は一生懸命に見つゝも目の底には白い衣からちらりとうつる形容出来ない聲が徐々に、心を引いて行く、次第に／＼恐怖にとらはれて行く様である。一瞬能から心が離れる、かつて讀んだグレイ、フワントム灰色の幻の小説に出て来るあの氣味の悪い舞臺を思ひ出す、悪魔シェー氏は舞臺でおどる、電氣が消える、觀集の一點より起つた無氣味な女の笑聲暗い／＼さうして靜まり返つて居る、

何だ、下らない、ほら明るい、能ぢやないか、羽衣だ羽衣だ、とたんに、場内の息づくのを感じる、晝である事が分る能をする人達にたのもしさを感じる、觀集にしたしみを感じる、自己の健在、それをとりまく總ゆるものに對し、感謝の念と頼りとを自覺する、天女は依然として、しかし先程よりは大分進行したと見えてだかやはり人の心を恐しさへとつれ込む、うすく開いたほゝえみの口を以て、そろり／＼鋭く羽衣を漁師より受取る、なぜあの様に恐しかつたか、一旦羽衣が終つて考へて見る、練習、自己を統一した、一身を投出した修業、彼の能の開祖にして大家なる本阿彌は言ふ、日々がそれ修業であると、即ち生活即修業である、此の練習、それによる動ぜしむる能はざる人格の強さ、動作のひびき、總ての言動に、人間生活のあらゆる眞實味を修業によつて取り入れたものが一つ／＼知らず、特に見る事も出来ないながらも我々の心をとらへた結果ではなからうか。